

お盆で実家に帰るなんて、本当は気が進まなかった。

「あんた今年こそ彼氏の一人も連れてきなさいよ」なんて母に言われるに決まっているし、二十七にもなって独り身の私にとって実家は針の筵みたいなものだ。

それでも三年ぶりに顔を出したのは、兄が久々に帰ってくると聞いたからだ。兄とは昔から仲がよく、たまに連絡は取っていたものの、顔を合わせるのはずいぶん久しぶりだった。せっかくなら一緒に飲みながら近況でも聞こうと思ったのだ。

そんな兄だが、お盆に帰るついでに友達を一人連れてくるらしい。

（友達って、どんな人だろ……。前に見たことある人たち、じゃないって言ってたなあ……）

兄の友達、と聞いて、私はなんとなく気楽に構えていた。どうせ兄と同じような、普通の男だろうと。

でも、玄関に立っていたその人を見て、私は思わ

ず言葉を失った。

背が高い。ものすごく高い。天井につかえそうなくらいの巨体で、肩幅は兄より一回り以上広い。半袖のTシャツから伸びた腕は丸太みたいに太く、血管が浮き出ていた。

そして、整った顔に、短く刈った黒髪と日に焼けた肌。眉は太く、目つきは鋭い。それなのに口元だけがどこか穏やかで、それが余計にちぐはぐだった。

「……拓弘です」

それだけ言って、その人——拓弘さんはぺこりと頭を下げた。低くて、ざらついた声だった。

「大学のラグビー部で一緒だったんだ。無口だけど、いい奴だから」

兄が軽い調子で紹介する。拓弘さんは何も言わず、もう一度小さく会釈しただけだった。

(うわ……なんか、緊張する……)

私は大きな男の人が昔から少し苦手だ。威圧感があるというだけで、勝手に体が縮こまってしまう。だから、この人がお盆の間ずっと家にいるのかと思うと、それだけで気疲れしそうだった。

夕食の席でも拓弘さんはほとんど喋らなかった。兄と父が野球の話で盛り上がっている横で、黙々と箸を動かしている。ただ、母が「たくさん食べてね」と言うと、「はい、いただきます」と律儀に頭を下げるところだけは、なんだか可愛いと思ってしまった。

あんなに大きな体をしているのに、食べ方はとても丁寧だった。お茶碗を持つ手も、意外と繊細に見える。

(……手、大きいな)

ふとそんなことを考えて、私は自分で自分に驚いた。何を見ているんだ、私は。

「お前まだ独りなんだって？」

兄が唐突に言い放ち、私はビールを吹き出しそうになった。

「な……なんで、それ今言うの」

「いやー、拓弘も彼女いないからさ。お前ら、気が合うんじゃないの？」

「もう、やめてよ！」

顔が熱くなる。ちらりと拓弘さんの方を見ると、彼は少しだけ困ったように眉を下げ、それでも何も言わずに味噌汁をすすっていた。

その、何も言わない横顔を見ていたら、なぜだか胸の奥がざわりとした。

夕食が終わると、父と母は慌ただしく荷物を持って出かけていった。明日の早朝便に乗るため、今夜は空港近くのホテルに泊まり、そこから二泊三日の旅行へ行くらしい。

お盆に帰ってきた娘を置いて旅行なんて、と呆れ

たけれど、三年も実家に顔を出さなかった私に文句を言う資格はない。

兄は「親父たちも元気だよなあ」と笑いながら、縁側で一人、残ったビールを飲み続けていた。私はリビングで、なんとなくスマホを眺めていた。

気づくと、拓弘さんが私の斜め後ろのソファに座っていた。テレビもつけずに、ただ静かに座っている。何をするでもなく、ただそこにいる。その存在感がじわじわと気になって仕方なかった。

「……実家、遠いんですか」

いきなり声をかけられて、私は少し驚いた。彼から話しかけてくるとは思っていなかったのだ。

「え、あ……東京です。一人暮らしで」

「そうですか」

また、沈黙。

でも、その沈黙はさっきまでとは少し違う気がし